



校長 落合浩一

【「ふるさとの民族芸能に親しむ」1年生相模人形芝居ワークショップの取組み】

学校内の木々も葉を落とし、いよいよ冬本番を迎えようとしている中、12月16日(土)、伝統文化歴史教育の一環として1年生を対象に相模人形芝居ワークショップを本校体育館で実施した。

相模人形芝居は、浄瑠璃に合わせて人形を操りながら演じる、江戸時代に近松門左衛門と竹本義太夫によって発展した人形芝居の一つで、昭和55年、国の重要無形民俗文化財に指定されている。現存している座・団体は県内に5つあり、毎年、平塚市の前鳥座、小田原市の下中座の皆様にご指導をお願いしている。

当日は、午前に授業を行い、午後12時30分にワークショップを開始、まず下中座の林座長による人形の解説、操作の実演をしていただき、その後、10グループに分かれて座の皆様から人形操作を教えていただいた。人形は、手・足や首など3人で操作し、息を合わせて人形を動かすところに難しさがある。生徒達は、林座長の解説に、時折笑みを浮かべながら興味津々といった様相で聞き入り、実演に至っては人形を代わる代わる操作しながら表現豊かに操作しようとして取り組んでいた。見て、触って、操作することで、江戸時代から受け継がれてきた伝統・文化を感じ取る貴重な体験となったに違いない。

ワークショップの後半では、「鎌倉三代記～三浦之助母別れの段～」の公演を見せていただいた。あらすじは、源頼朝が亡くなった後の鎌倉時代を舞台とした話で、頼朝亡き後、次男源頼家(京都方)と四男源実朝(鎌倉方)が幕府の実権を握ろうと争い、ついには戦となる。実朝陣営では、12歳の実朝に代わり、北条時政が指揮を執っていた。時政の娘、時姫は敵方の三浦之助義村を恋い慕い、一人家を出て三浦之助の母の看病をしていた。夫・三浦之助への恋と

父・時政への恩との間で板挟みに嘆く時姫、敵対する関係の中で三浦之助の母への想いに揺れる心情を演じた作品である。

ワークショップを終えた生徒の感想では、「人形を三人で操るために、息を合わせることは難しい。前鳥座、下中座の皆様がとても器用ですごいなと思った」「公演は予習したこともあって分かりやすかったが、言葉遣いが難しかったので分かるようになりたい」など、人形操作の難しさや今後の学習への抱負が述べられていた。前期課程生では、今後も様々な体験学習に取り組むが、それぞれの取組みに意味を持たせ、より深い学びへとつなげていって欲しい。



【今年はラニーニャ現象により寒い冬に注意！】

今週(12月18日)になり、寒さが一段と厳しくなってきた。気象庁では、12月11日付でラニーニャ現象が発生し、今後春まで続く可能性が高くなっていると発表した。この現象は、太平洋赤道の日付変更線付近から南米沿岸にかけて海面水温が平年よりも低い状態が続き、東風が平常時よりも強くなり、西部に温かい海水がより厚く蓄積する一方、東部では冷たい水の湧きあがりの方が平常時よりも強くなるそうだ。(エルニーニョ現象はその逆)このため、太平洋赤道域の中部から東部では、海面水温が平常時よりも低くなり、日本では多くの降雪が予想されている。とにかく寒い冬となるようだ。